第2回次世代施設園芸セミナー
2014/07/23

資料3

大規模施設園芸の可能性と課題

maruo@faculty.chiba-u.jp

千葉大学大学院園芸学研究科　教授　丸尾　達

施設園芸から完全人工型植物工場まで

- S30年代からの施設園芸の発達
- 養液栽培が発達（葉菜類・果菜類）
- 国内生産・国内消費、高品質野菜が求められる
- 安定供給、安全・安心、トレーサビリティの要求
- 生産性の向上が必要不可欠
- 生産者の経営規模が小さい
- 全国各地に分散
- 夏季高温・強日射に(経済的な環境調節は困難)
- オランダ（北緯50度の園芸産業）型技術との違い
- 各種機器の性能の革新的向上

初期の施設園芸（昭和30年代の農ビ竹幌ハウス）

植物工場の基本要素「養液栽培」はここから始まった

ハイドロポニックファーム　(1946）東京調布市

日本養液栽培研究会（JHS）

閉鎖型苗生産施設　徳島シードリング

次のステップに向かう施設園芸

- 施設園芸の大型化・集積化
- 効率化・合理化・低コスト化の進展
- 輸出対応
- TPP対応
- 強い農業・攻めの農業
- 施設園芸フードバレーの形成
  - ■エネルギ施設との統合
  - ■種苗産業・苗生産産業との統合
  - ■集出荷・パッキング施設との統合
  - ■加工施設との連動
  - ■流通・輸出産業との連動